

は、大溝の水を川上から取り入れて庭の池に導き、下の方からまた大溝に流している。この近くの桂 太郎旧宅でも同様である。この水守屋敷では、池の水をそのまま大溝には戻さずに、これを地面の下を通して台所まで導びいている。この「ハトバ」の造りが面白い。水面まで下りた板囲いの下から水中を通して流れ込む日光の明るさは、水洗いの手元を照らすに充分なものだ。「ハトバ」にもっと暖かな気分をもたらすものは、残飯をぬめてに近よってくる魚達である。飯粒をくわえては、また水中にもぐる魚の、逆光を受けたシルエットは美しいものだ。このお宅は、一番上み手に位置しているためでもあるが、戦前までは、この水で茶の湯を楽しんだという。

また、これらの家の前の流れには、木箱が沈められている。鮎を入れておいて、水藻で太らせてから食すのだという。「ハトバ」の小魚を捕えて食べることはない。とも話してくれた。去年五月、市と有志が協力して取水口から五百メートル程の間を囲って数百匹の錦鯉を放流した。色彩豊かな鯉の清流に群遊する有様は、まことに

見事である。近いうちにさらに三千匹が放流されるといふ。道路脇の水路に錦鯉を泳がせるという試みは、津和野市の例が知られている。ここは、萩市から直線距離で三十キロの所にある山勝ちの城下町で、「山陰の小京都」と別称され、森 鷗外旧宅などの史跡も多い。この市の中心を殿町と云い、その道路脇の溝には、いつもきれいな流れがあり、錦鯉が群遊する。五月のあやめの頃の美しさは格別である。道路脇にこうした景観が展開する点がすばらしいのであって、このように試みは大いに広まってほしいものである。

さて、大溝の水量を一定に保つことは、往時の水守りにとって仲々困難な仕事であつたらうが、現在ではポンプによる揚水になっている。そのため、常に豊かな水が流れるようになったわけだが、市当局の定めた水量は少々多すぎるようだ。「ハトバ」の一番下の石段はいつも水面下にある。川島地区からさらに下流の、住宅の多い地区に入ると、その意図がはっきりしてくる。すなわちこの豊かな水量は、家々の家庭排水やゴミを日本海まで押し流すためのものだ、ということが、すると、上流の